まほろん森の塾でのフィールドワーク体験

和知　千紘

要　旨

令和４年度の小中学生向け体験講座「森の塾」では、子ども達にに文化財に関心を持ってもらい、将来の文化財への担い手を育てていこうという観点から、当館周辺及び白河市内の文化財をめぐるフィールドワーク体験を実施した。本稿では、感染症対策について触れつつ館内での活動が主であったこれまでの体験の状況との比較・分析を行い、実績と反省点について報告し、次年度以降の当館の講座を計画するにあたっての材料としたい。また、地域に残る文化財についてフィールドワークを用いた体験を行うことへの展望を示したい。

キーワード

体験活動　街道　地域の歴史　フィールドワーク

１　はじめに

「まほろん森の塾」とは子ども達が昔のくらしや技術を体験することで、歴史をわかりやすく、親しみやすく学習することを目的とした当館が実施している体験学習である。開館当初から続いている体験講座であり、毎年、小学校４年生から中学生までを対象に「塾生」を募集している。

年度ごとにテーマを決めて活動しており、令和２年度は「昔の明かり」に因んだ体験学習、令和３年度は「縄文土器づくり」をテーマとした。令和４年度は白河地域を通る奥州街道をテーマとして取り上げ、街道周辺の地元の文化財をめぐるフィールドワークを中心とした活動を行った。

本稿では、コロナ禍における体験活動の在り方を検討し、本年度実施したフィールドワークの成果について、これまでの「森の塾」における体験活動との比較を試みた。地域の文化財に関心をもってもらうだけでなく、将来への文化財の担い手育成を図る取り組みを紹介する。さらに、体験学習における新型コロナウイルス感染症対策として工夫した点なども併せて報告する。

２　実施計画策定にあたっての経緯・目的

当館では「森の塾」実施計画を前年度の２月に策定し、３月には塾生の募集を開始している。

実施計画を策定するにあたり、従来は「子どもたちに生きる力を身に着け、歴史を学習する」ことを目的として年度ごとにテーマを設定し、体験内容を構成してきた。令和３年度は開館20周年を記念して出土した縄文土器などが国の重要文化財に指定されている法正尻遺跡を取り上げた企画展示が予定された。そこで「森の塾」では、縄文土器づくりから土器の使われ方までをテーマとした。テーマはシンプルながらも塾生にとっては「土器とは何か？」「縄文時代の人はどうやって調理をしていたか」について考えるきっかけになり、それらの学習をとおして縄文時代の暮らしに関心を持つことにつながったと感じた。

令和４年度は奥州街道をテーマとし、街道周辺の文化財を見学することによって文化財をより身近に感じてもらい、文化財に関心を持つきっかけとすることを目的とした。白河は古くから奥州の関門として位置づけられ、白河の関に代表されるように政治的・軍事的にも重要な役割を果たし、多く人々が行き交っていた。近世になると街道の町として発展していった。そのような歴史を踏まえ、市内に残る代表的な史跡である小峰城をはじめ、街道沿いに残る歴史的建造物、当館の近隣に所在する石阿弥陀の一里塚、鍛治屋敷館跡など、街道の歴史に因む文化財について学ぶことで、地元の歴史に関心を持つきっかけになると考えた。

また、地域の文化財を取り巻く環境として、社会状況の変化に伴う人口減少があげられる。歴史的風致を形成する商家や蔵などの歴史的建造物の維持管理が困難になってきている。さらに、白河市中心市街地を形成するいわゆる城下町の町並みも空き地の増加や建物の老朽化などで次第に失われつつある。

こうした社会問題のなかで文化財は、地元教育委

表１　令和４年度　森の塾実施内容

内　　容	実施日	参加人数
第１回　入塾式・田植え・小豆の種まき	令４.6.12	8　名
第２回　布ぞうりづくり	令４.7.10	8　名
第３回　まほろん周辺の文化財見学	令４.9.4	7　名
第４回　小峰城周辺の文化財見学	令４.10.23	8　名
第５回　文化財マップづくり	令４.11.27	7　名
合　計		38　名

※なお、令和５年１月21日に、最終回欠席者１名に対し補講を行った。

員会の施策だけでなく地元住民やボランティアなどで守り伝えられてきていることもまた事実である。

今回の「森の塾」のテーマには、こうした地元に残る文化財を守り、伝承する人々との交流をとおして、将来への文化財の担い手を育成することを目的の一つとした(表1)。

３　館内学習における感染症対策

新型コロナウイルスの感染拡大が始まって３年目に入った令和４年、当館では引き続き密集・密閉・密接の３つの密を避け、入館時の検温、手指の消毒やマスクの着用を来館者に呼び掛けている。

「森の塾」の開催にあたっては、事前に塾生及び保護者に対し、感染症対策の説明を文書で送付した。具体的な内容としては、館では積極的に感染症対策に取り組んでいること、来館する上での基本的なお願い(マスク着用、手指の消毒等)、森の塾参加にあたってのお願い(検温実施への協力、体調不良の場合の欠席等)を記している。第１回目の入塾式においても、重ねて感染症対策についての説明を塾生及び保護者へ行った。

なお、各回の講座開催においても、開催前日には塾生の保護者へ連絡を取り、体調の確認や体調に異常がある場合は欠席させるように協力をお願いした。

会場設営については、「三密」を避ける措置として、塾生同士、職員同士との距離を１m以上確保できるよう机等を配置した。室内での解説はパワーポイントを使用して行った。第２回目以降の「布ぞうり作り」の解説の際には、製作手順など職員の手元をビデオカメラで撮り、スクリーンに映写して塾生に見せるなど工夫した(第１図)。

また、「布ぞうり作り」において職員の補助を有

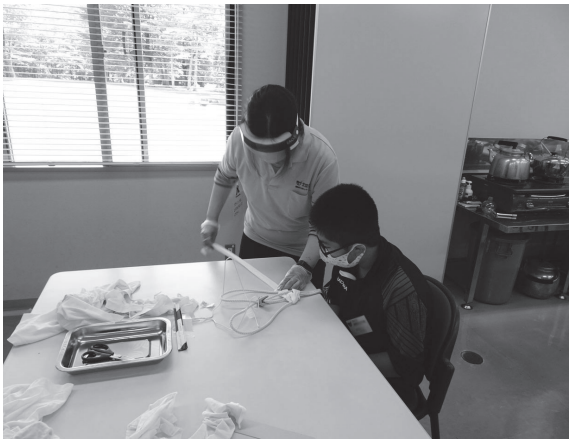
第１図　布ぞうりづくり　作り方の解説

する場面では、フェイスシールドとビニール手袋を着用して対応した(第２図)。

その他、体験活動を行う際は、道具の共用を避けるため、原則として塾生ごとに個別に道具を準備した。なお、色マジックなどの道具の数に限りがあるものについては、塾生が一回使用するごとに使用済みの道具を専用の箱に入れ、職員がその都度消毒を行った。塾生には、手指の消毒を呼びかけたものの、健康上の理由でアルコール消毒をすることができない塾生もいたため、手指消毒に代えて会場となる部屋に入室の際の手洗いを勧めたり、その塾生専用の道具を準備したりするなどの対策も行った。

感染症対策をとりながら塾生が効率的に、短時間で作業しやすいように入念に準備する必要があったほか、後片付けは職員側で行う必要があり、感染症拡大前に比べ職員の負担が増えた。

活動時間については、感染症の拡大状況と活動内容を鑑みながら決定した。感染症拡大前は午前10時から午後３時までの５時間(正午から１時間は昼休憩)だった。しかし感染症拡大が始まってからの２年間は、館内での飲食は原則禁止としていたた



第２図　布ぞうりづくり　指導の様子

め、「森の塾」の体験活動を午後１時から午後３時30分までの２時間30分と例年の半分の時間としていた。この時間設定では、充実した体験を提供することが困難であり、今後の体験学習の課題の一つになっていた。

令和４年度は、活動時間を午前10時から午後３時までとした。昼食は自席でとり、会話の際はマスクをつけるように呼び掛けるなど取り組みを行い、充実した体験学習の提供と塾生間のコミュニケーションをとることができるよう感染症対策との両立を図った。

４　フィールドワーク

（１）まほろん周辺の文化財をめぐる

令和４年度第３回目の活動は、当館周辺に残る文化財の見学を行った。見学先は石阿弥陀の一里塚、鍛冶屋敷館跡、石阿弥陀の板碑、(伝)金売吉次の墓である(第３・４図)。

当館は、旧奥州街道のルートに沿った国道294号線が近くにあるほか、奥州街道の変遷を語る上で重要な石阿弥陀の一里塚も近隣にある。また、中世の館の跡と考えられている鍛冶屋敷館跡、白河市立南中学校建設に伴う発掘調査が行われた芳野遺跡の中世の集落跡を紹介することで、中世の道、近世の奥州街道、現代の国道294号線といった道の変遷をたどりながら文化財の見学することを目的とした。

次に、活動の様子について報告したい。開講の際に体調確認及び感染症や熱中症対策についての確認を行った後、見学先に関連するワークシートや地図を塾生に配布した。午前中は見学する文化財について職員によるパワーポイントでの説明を聞きながら、ワークシートに書き込んで事前学習を行った。街道の発達と宿場町の役割や、現在の福島県や白河を通る街道について説明を行った。白河には奥州街道が通り、街道沿いには人が活動した痕跡があることや街道が成立する前の時代にも白河に道が通り、それにまつわる言い伝えから名づけられた地名があることを説明し、イメージをつかんでもらった。

午後の文化財見学に当たっては、塾生(令和４年度は８名参加)を２班に分け、時間差をつけて出発させた。なお、史跡がある土地の所有者にはあらかじめ見学と写真撮影の許可を得ている。また、安全対策として班ごとに職員が１人ずつ付き添うほか、後発の班の後ろに職員を１人配置した、急な体調不良等に備えて車１台を帯同した。第４回の活動の際もこの態勢で職員を配置した。

フィールドワークでは、ワークシートに基づき課題に取り組んだ。石阿弥陀の一里塚では、 一里塚に上り大きさや形を体感し、一里塚間の距離を計測するなどした。鍛冶屋敷館跡では、土塁が残り、現在は中世の館跡と推定される一方で、関ヶ原の戦いに関連した上杉方の防塁跡とする説も提示されている。塾生は鍛冶屋敷館跡の性格やその背景につい

第３図　第３回活動で使用した地図

第４図　江戸時代の白河宿周辺の奥州街道の様子　『江戸より奥州津軽迄道筋之圖』江戸時代後期　国立国会図書館デジタルコレクション所蔵より抜粋・一部加工

第５図　石阿弥陀の一里塚

第６図　（伝）金売吉次の墓での職員の説明

て、検討を行うなどの課題に取り組んだ。また、(伝)金売吉次の墓では、墓の由来などについて、吉次に扮した職員から説明を受けた(第５・６図)。

その他に石阿弥陀の板碑、(伝)金売吉次の墓の見学に際し、言い伝えに因む「皮籠」の地名を標識やバス停等国道294号線沿いにあるものから探した。

当日は暑く、熱中症対策としてこまめに水分補給をさせながらの活動となった。暑さと疲れで集中力が途切れがちな場面もあった。しかし、(伝)金売吉次の墓の見学では、演出の効果もあったのか関心をもって職員の説明を聞いたり見学したりする場面があった。

見学の最後には、奥州街道の道の変遷などの振り返り学習を行った。塾生からは、「今回の活動でまほろん周辺に様々な史跡があることを初めて知った」との感想があった。金売吉次の話を通して、言い伝えが地名の由来となっていることについて興味を持ちながら覚えることができたことも感想からうかがえた。

（２）小峰城周辺の文化財をめぐる

第4回目の活動は、旧奥州街道にあたる白河市街地に残る小峰城周辺の文化財を歩きながら見学した。

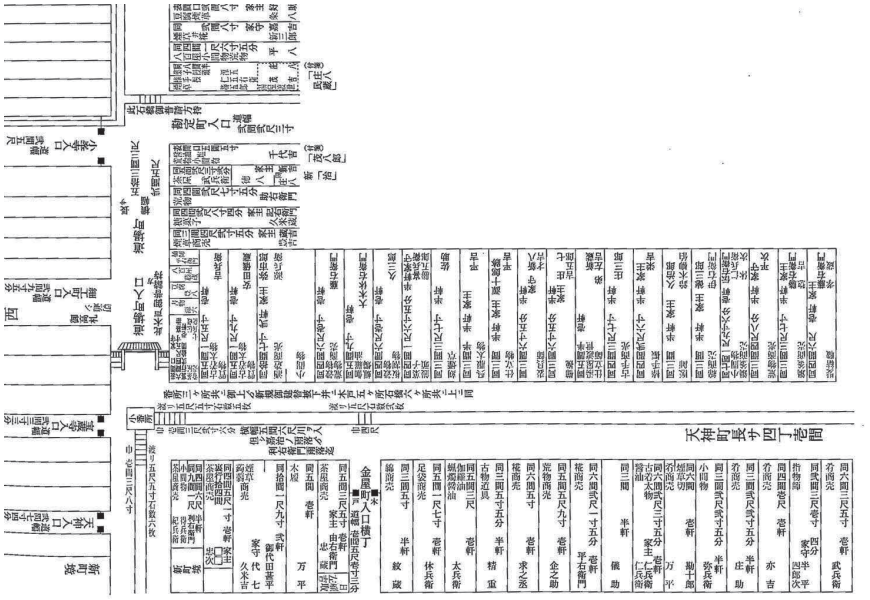
見学先は旧脇本陣柳屋旅館建造物群をはじめとする歴史的建造物や小峰城外堀土塁跡、小峰城である。第３回で歩いた国道294号線(旧奥州街道)を白河市街地方面に進んでいくと、旧城下町エリアに至る。そこには城下町特有の鉤形に折れ曲がった道や短冊形に区切られた敷地割と、表間口が狭く奥行きが長い建物が残っている。中心市街地は約400年前には町の原型がつくられており、寛永4(1627)年の白河藩成立後、初代藩主丹羽長重によって本格的に小峰城の築城と城下町の整備がなされた。それ以降、ほぼ当時の形態を残したまま現在に至っている。旧城下町エリアにある奥州街道を歩くことで、城下町の特徴や歴史的建造物を街道に関連付けて学ぶことを目的とした(第７～９図)。

フィールドワークに当たり、史跡がある土地の所有者へ見学と写真撮影の許可を得るのみならず、見学ルートとなる道沿いの施設や商店にも協力を得た。町の特徴として道が狭く見通しが悪い箇所があることを踏まえ、塾生には交通安全に注意するなど安全対策にも配慮した。

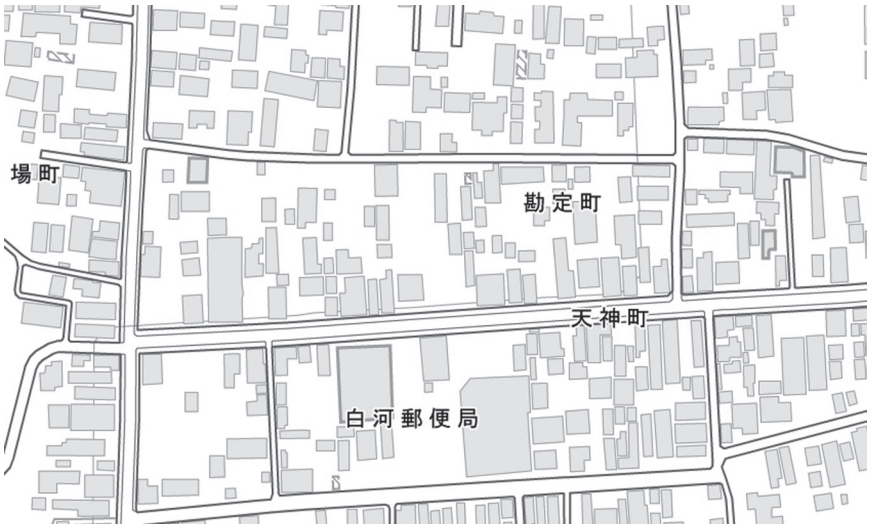
当日は現地集合・現地解散とした。集合場所である藤田記念博物館(藤屋建造物群)を出発し、奥州街道と原方街道の分岐にある道標を見学した後、道の左側と右側の２班に分かれて歩いて写真を撮りながら見学した。鉤型に折れ曲がった道や「大手町」に代表される地名、建物の形などに注目しながら街道沿いを歩いて行った。街道沿いにある文久３(1863)年に創業した菓子舗玉家では、白河藩の御用を務めたことを示す看板を店内で見ることができた。また、旧脇本陣柳屋旅館建造物群では蔵座敷の内部を見学することもでき、建物の外観だけではなく、古い時代の建物の内部やそれにまつわるものも見学した(第10～12図)。

街道を離れた後は、小峰城に向かった。途中で林家住宅建造物群に寄り、敷地の一角に残された小峰城三の丸内の土塁跡を見学した。現在の小峰城よりも江戸時代の小峰城は範囲が広かったこと、土地所有者が住宅建造物群とともに土塁を大切に保存して

第７図　『奥州白河城下全図』　白河市指定重要文化財　白河市歴史民俗資料館所蔵
一部抜粋・加工



第８図　「天神町絵図」【２】　文政６(1823) 年　白河市歴史民俗資料館編 2003 より抜粋



第９図　現在の白河市天神町の地図　国土地理院地図より掲載

いることを知ることができた(第13図)。

午後からは小峰城の見学を行った。最初に帯曲輪の石垣を見学した。小峰城は東日本大震災で石垣が崩落するなどの被害を受け、帯曲輪の石垣は令和４年に修復工事が完了、４月に一般公開された。震災で文化財が被災したこと、修復するためには多くの時間と労力が必要となったことを解説した。その後、小峰城ボランティア職員の説明を聞きながら三重櫓に上ったり、松平定信に関するクイズなどの課題に取り組み、小峰城について学習した(第14・15図)。

活動の最後には振り返り学習を行った。「街道沿いには意外とたくさんの古い建物があることがわかった」、「小峰城には戦うために様々な仕掛けがされていることがわかった」、「車で移動した時には気づかないけれど、歩いてみていろいろなことがわかった」との感想があった。感想からは地元に住んでいても気づきにくいことに触れる良い機会となったことや、ボランティアからの小峰城の解説を聞いて塾生が城の仕組みや歴史に関心を持つことができたことがうかがえた。また、小峰城外堀土塁見学の際には、見学の最後に土地所有者に話をうかがう機会があり、住宅建造物群の築年数を聞くことができた。単に見学するだけではなく、地元の文化財を守り伝

第 10 図　歴史的建造物見学

第 13 図　小峰城外堀土塁跡

第 11 図　市内に残る鉤形の道路

第 14 図　小峰城曲輪の見学

第 12 図　道標（復元）の観察

第 15 図　施設ボランティアによる解説

える人々との交流によって、文化財により親しみを感じることができる教育的な効果も期待できると感じた。

（３）文化財マップをつくる

第５回目の活動では、第３・４回目のフィールドワーク学習について振り返りながら街道沿いの文化財マップを作成し、学習内容の報告会を行った。

「文化財マップづくり」では、地図を貼ったパネルを職員が用意した。塾生は当館周辺のマップと、白河市中心市街地の街道・小峰城周辺のマップの班に分けた。午前中は写真やワークシートを見ながら、第３回や第４回の学習内容を思い出しながら、付箋に書き出させた。写真を見ると活動の様子を思い出すことができたようで、自分が担当となった箇所について、塾生同士で相談しながらのマップづくりを進めることができた。

午後は付箋に書いたことを画用紙に清書してもらうほか、写真を切り抜いて地図に貼ってもらうなどして、文化財マップを完成させた（第16図）。その後、この日の活動内容や今年度の「森の塾」感想を記入するなど振り返り学習を行った。なお、完成した「文化財マップ」や活動の感想を貼ったパネルは

第 16 図　文化財マップづくり

第 17 図　発表会のようす

２月末から館内の常設展示室内に展示している。

活動の集大成として、塾生の保護者のほか、小峰城について説明したボランティアや職員を聴衆として報告会を行い、塾生自らが学習したことや文化財をめぐっての感想を発表した(第17図)。

「森の塾」の体験から、ともに過ごした者同士でコミュニケーションを取り合って、協力しながら「みんなでつくりあげた」だけでなく、学びの成果を自らの言葉で伝え、他者と共有するという経験をすることができた。コロナ禍において共同で事を成すことが難しい中、良い機会になったと感じるとともに、これらの文化財についての学びが塾生の心に強く残っていてほしいと願う。

アフターコロナにおける基本的な感染症対策を前提としつつ、フィールドワーク学習を含む塾生同士による共同での作業は、「生きる力」を育む上で重要であり、今後の「森の塾」の企画立案に反映させたい。

5　おわりに

（1）実践にあたっての結果と反省点

今回は地元の文化財についてフィールドワーク体験を通して学び、地元の歴史や文化財に親しみや関心を持つことを目的として実施した。

塾生からの感想を見ると、「町を探検するのが楽しかった」「学校ではなかなかできないことがやれて嬉しかった」「チームで行動しながら、昔の蔵を探すのがおもしろかった」とあり、チームで楽しみながら街道沿いの文化財について学習することができたと感じられた。

次に課題についていくつか述べたい。今回の塾生は小学４年生が多く、まだ授業で歴史の学習が行われていない。そのため江戸時代がどんな時代なのか、街道はどんな役割を果たしたのかをパワーポイントで写真や絵を使用しながら説明はしたものの、塾生にとってイメージをつかむのが難しかったと感じた。鍛冶屋敷館跡の課題でも学年によっては難しいと感じたので、場合によってはクイズをとりいれるなどの工夫が必要かと感じた。(伝)金売吉次の墓での説明は演出のインパクトも功を奏して、ほかの事前学習や説明よりも塾生の記憶に残っていた印象がある。事前学習も場合に応じて印象に残りやすいような工夫を取り入れた方がよいと感じた。

今年度はコロナウイルス感染症拡大防止対策を講じながら館外での活動をメインとした。団体行動や共同作業が増える都合上、例年以上に安全対策や感染症対策に細心の注意を払う必要があった。野外活動となることから、体調不良など突発的な事態への対応のために職員の増員や休憩・待機場所の設定なども必要となった。地元の施設や土地所有者による協力が不可欠となり、事前に計画について打合せをもつなど、職員の準備や実施に係る負担も増加した点も課題に一つに挙げられる。

（2）フィールドワークと地域の文化財

白河市や隣接する自治体に住み当館に何度か足を運んだことがある小学生にとって、市内の文化財について触れる機会は、小峰城や南湖公園といった白河市を代表し、かつ駐車場等が整備された国指定史跡に学校の行事等で訪れるというケースが多い。また、白河市内の小学校では景観に対する関心と良好な景観形成への意識を育み、身近に存在する地域の魅力に気付く力を養うため、景観学習を開催し、実際に中心市街地を歩き見学をしている。

塾生たちもかつて街道を歩いた旅人になりきり、

追体験することによって、「昔の人はどうやったらこんな長く道を歩けたのかな」と車や電車がない時代の移動について想像を働かせる場面も活動の中で見られた。また、普段では見過ごされがちな街中に設置されてある説明板や史跡の看板、道端の石碑・石仏、小さなお堂等など文化財だけでなく街並みや地名に着目しながら歴史を学習できたと感じている。

このように白河市は地域の文化財に触れる機会が多い自治体である。今回の「森の塾」の学習によって現在も残されている市内の景観が成立した背景として、宿場町としての成り立ちや地名を知ることをきっかけに、地域の歴史についての理解が深まることを期待したい。

また、まほろん周辺の文化財をめぐることによって文化財が身近にあることを知ることができれば、街道に限らず、地域の歴史に関心を持つきっかけとなり得るだろう。現在社会科で歴史を勉強していなくても、塾生である子ども達が歴史を勉強した時や中学生、高校生あるいは大人になり、何かのきっかけで自分達が住んでいる地域の歴史について学ぶ機会もあるだろう。さらに地域の文化財を守り伝える人々との出会いやボランティアとの交流の機会を提供できた。「森の塾」での活動を思い出してくれたら、「身近な文化財を知り、将来の文化財への担い手を育てていく」目標に繋がることを期待したい。

塾生が作成した文化財マップは、館内に展示することによって、白河市内の街道沿いの文化財についての良い紹介材料となるだろう。既製の観光ガイドマップには無い「森の塾生が地元に残る文化財を調べた」手作りマップを来館者が見て、市内の文化財について回遊することができれば、白河の歴史や文化財について知ってもらう良いきっかけとなるだろう。当館がどんな施設でどのような体験活動を行っているかなど、当館の教育・普及活動アピールする良い機会となったと評価できる。

今年度の活動の成果と反省、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を踏まえた上で、来年度の「森の塾」実施に繋げ、次年度以降の活動に反映していきたい。

【引用・参考文献】

白河市歴史民俗資料館編 2003『白河城下町絵図報告書』白河市歴史民俗資料館調査報告書第１集　白河市歴史民俗資料館

白河市都市計画課 2017『まちのすがた～景観学習で学んだこと～』No.１　白河市

白河市まちづくり推進課 2021『白河市歴史的風致維持向上計画』（第２期）　白河市